

お わ り に

今年次のわれわれの研究実践は、任命したばかりの研究主任の死によって開始早々にひとつの衝撃を受けた。また、秋には行事が例年以上に多かったことと、校舎の増築工事が着工されたことが、研究の進行に少なからず影響を与えることになった。このような条件の中で、一同は多大の負担に耐えながら、ここに見るような実践を積み上げて来た。

ふり返ってみて、よくやったという思いがある一方で、懸案が解決されなかったという思いも残る。とりわけ、前号の「おわりに」で記した「養護・訓練」の本格的実施を、フロスティック・テスト及びITPAを中心において進めてみたい、との考えは果たされなかった。このことは、「豊かな心」を単なる観念的な謳い文句に終らせずに、認知能力を高めるという観点から実行を意図していただけない、心残りの結果となった。こうして、本校における養護・訓練の取り組みは依然として課題のまま残されるわけだが、この事情は、恐らく多くの精神薄弱児養護学校に共通するものだと思う。それは、認知・運動・言語などをそれぞれ専門的に訓練するだけの知識・技能を持つ職員がきわめて少いという理由のほか、学校という場が、これらの機能を取り出してドリル的に扱うことに心理的抵抗感を持っているのではなかろうか。教育とは全人格的なものであるべきで、ある子どもが弱点として持っている何らかの機能的欠陥を局所的に扱うよりも、教室での学習活動の中で自然に伸ばして行く方が正しい道だとする考えがあるように思われる。そうだとすると、養護・訓練の前進は今しばらく時日を要することになるだろう。

その他、前号で課題としていたもののうち、家庭との連携によって学校での指導をいっそう実効あるものにするという点は、特に意識して取り組んだわけではないが、今回の研究実践報告に一部その事例が見られるとおり、ある程度の前進が得られた。また「交流」を通じて「豊かな心を持ち、たくましく行動する子」へ、というねらいは、身内の中では元気がよいが、外に出るとどうも、という傾向にてらして、十分に追求する必要があるはずであるが、これはさしたる前進なしに終わった。近隣の学校は好意的な態度であるが、ねらいを高めるためには考えるべきことが多い。

かくして、この研究実践はひとつの区切りを迎えることになった。当面は、発表のさいに得られた批判をまとめて総括し、来期に備えることとする。